

■発情ミコトちゃんは男子たちの肉便器

超災害や超犯罪に対抗すべく生まれた組織『ドライブヘッド』。その一員である石野ミコトは、自身がドライブヘッド隊員であることを隠して学園生活を過ごしていたのだが……ある日、狂気の科学者が催淫ウイルスを生み出し、テストとして学園の一部を閉鎖してウイルスを感染させた。不運にもその閉鎖空間にいたミコトとクラスの男子たち。密室の中、催淫ウイルスによる狂気の発情時間が始まる……

◆

(うっ…… 一体何が起きたの?)

突如として閉鎖されたミコトの周囲。直後に噴出されたガスにより、一時気を失っていた石野ミコト。状況を確認するべく周囲を見ると……そこには狂気的な景色が広がっていた。

ガス……ウイルスによって発情した男子たち。彼らが同じ発情した女生徒や女教師に襲いかかっていたのだ。

「あっ♥♥ だめええっ♥♥」

「キミたちっ♥♥ やめなさい……おっ♥♥ んほおおおおおおお♥♥♥」

生徒の春野かすみ、教師の新門めぐみ。二人は特に人気が高く、大勢の男子たちに囲まれている。既に幾度も陵辱されているのか、結合部のみならず身体中に白濁が降り注がれている。一見すれば無惨な輪姦だが……よく見れば、犯されている二人も表面上は拒絶しているものの、どこか悦んでいるように見える。

(なんなの……これ……? なんで男子たち、あんな凶暴に……
それに、二人も……どうして、ちょっと嬉しそうなの……?)

目覚めたばかりのミコトは、状況を見て思い出す。急にガスが噴き出したこと。そして自身はとっさに皆を庇ってガスを浴び、結果として極度の発情により失神したことを。

(みんな、ガスの効果で興奮しちゃってる……?
早く脱出を……いえ、二人を助けないと……っ?!)

一度眠ったとはいえ、失神するほど性欲を高められていたミコト。上手く頭が回らない中、どうにか思考するが……目覚めたミコトの周囲には、既に男子たちが待ち構えていた。

【あ、起きたんだねミコトちゃん】

「みんな、何してるの?! 早くあんなことやめさせないと……きゃっ?!」

ミコトを眺める男子を説得し、かすみと新門を輪姦する男子たちを止めさせようとするが……男子たちは話を聞かず、一斉にミコトに手を伸ばして身体を拘束する。

「ちょっと、何するのっ?」

【決まってるじゃん、みんなでミコトちゃんを輪姦するんだよ】

「なっ……何を言って……」

【ああもう説明とか面倒だから、とにかくヤッチャうね】

「話を聞いて……ひっ! いやあっ!」

やはりガスに含まれる催淫効果のせいで、とても正気ではなくなっているようだ。ミコトは手足を押さえ付けられたまま、服を脱がされる。思わず悲鳴を上げるが、男子たちは抵抗すら愉しんでいる。

【イヤっていうけど、ボクたちミコトちゃんが起きるまで待ってたんだから、むしろ感謝してほしいなあ】

【ま、すぐに気持ち良くなるからイヤでも感謝されるんだけどね】

「誰が、こんなことに感謝なんて……あつ♥」

【ほら、もう気持ち良くなってるよ？】

「気持ち良くなってる……♥ んっ♥ ……なってないっ！」

早速 胸を触られ……その瞬間、触れられた部分がカァッと熱くなる。
火傷したかのように思えたが、それは実際には性の快楽だった。
あまりに強すぎるがゆえに熱く感じ、反射的に嬌声が出てしまう。
一度 快楽だと認識してしまうと、すぐ肉体……本能が適応されていく。
真っ先に催淫効果を受けたミコトは発情具合も高いのか、あつという間に秘所が濡れて下着が湿っていく。
それでも快楽を……性犯罪を受け入れるわけにはいかない。
男子たちも催淫効果のせいでも本能を抑えられない被害者ではあるが、彼らを救うためにもハッキリと快楽を否定する。

「こんなことして、恥ずかしくないのっ?! つ……♥ 今すぐ、やめ……」

【……そんなにイヤなら、ミコトちゃんはもういいや】

【そうだね。じゃ、ボクは新門先生をヤっちゃおうかな】

「!」

ミコトが拒絶し、すぐに離れる男子たち。ミコトが拒絶したために、彼らの性欲の矛先がかすみや新門に向けられたのだ。

(そんな……! アタシが相手をしないと、他の女性たちが余計にひどいことされるなんて……!)

女性たちを助けるためにも、男子たちに犯されるわけにはいかない。
なのに拒絶すれば自分が相手をしない分、女性がより犯されることになる。
今は催淫効果のせいでも男子たちを振り払うこともできない。また、閉鎖されており単身で脱出も不可能。

(アタシが……♥ 輪姦……されるしか……♥)

本意な快楽など否定しなければならない。だが状況がそれを許してくれない。
……快楽を、性の本能を受け入れる『建前』が出来上がり、ミコトの心臓が一つ強く脈打った。

「……待って……!」

女教師に近付いていく男子を止め、おそろおそろ口にする。

「アタシが……相手、する……から……♥ みんなには……手を出さないで……♥」

ミコトは自身の身体を捧げることに決めた。
他の女性たちを助けるため。そして性欲を吐き出させ、男子も救うために……。

(ドライブヘッドの一員として……♥ アタシが、みんなをレスキューしてみせる……♥)

【じゃ、早速オマンコいじらせてもらうね♪】

「ひいんっ♥ ちょっ、もっとやさしく……んひいっ♥」

ここまで計算していたのか、男子は許可が出るとすぐさま手を伸ばして陰唇を揉みこねる。
先程と違ってミコトが一応は快楽を受け入れたためか、愛撫の快感が増している。。
気持ち良さのあまり思わず腰を振って男子の手から離れてしまうが、
男子は数で押し切って強引に股間、尻、太股を好き勝手に触れまくる。

【はは、感じすぎじゃないミコトちゃん?】

【どこが気持ち良い? リクエストしてくれれば弄ってあげるよ〜♪】

「あつ♥ あんっ♥ ど、どこが、なんて……♥」

(嫌がったら、また離れていっちゃう♥ 適当に愛想よくしないと……♥)

本当は、こんな♥ 全然気持ち良くないんだから……♥)

心の中で言い訳し、『男子を惹きつけるために』媚を売る。

「全部っ♥ 全部気持ち良いのおっ♥」

【全部とか、やっぱり見た目通りのビッチだねミコトちゃん！
そのドスケベマンコ、すぐに犯してあげるよ！】

「ひいひいっ♥」

押し倒され、パンツがズラされて陰部が露出する。
既に蕩けた陰部はぐっしょりと湿っており、経験がないミコトでも、自身の身体が牝として準備できたことを理解できた。
そして男子も、見事に怒張っていた。催淫効果のせいかサイズは特大、精力も凄まじいのが一目で分かる。

「っ?!」

(こ、こんなに大きいの……? 精液の匂いも、スゴい……♥
こんなので犯されたら……♥ アタシ……♥)

眼を覆いたくなるほどの絶倫巨根が、牝孔に宛がわれる。その時になってミコトは再びレイプされる恐怖に襲われ……

「ま、待って! やっぱり……」

【ほら挿れるよ、せーのっ!】

すぽおっ♥

「あああああああつ♥♥」

勢いをつけた遠慮のない挿入。巨根の先端が膣道の奥まで突き刺さり、凄まじい快感にミコトはすぐさま絶頂。
犯される恐怖など一瞬で吹き飛び、桃色の愉悦に眼を剥いて絶叫する。

「ひっ♥ ひいひいっ♥♥」

(こ、こんなに気持ち良いなんてえっ♥♥ おまんこ……セックスっ♥♥ 気持ち良すぎるううっ♥♥)

理性まで掻き消されそうになるほどの快樂。
ミコトは目的を見失わないよう、ピストンを受けて再び絶頂しそうになりながら必死で意思を留める。

【ミコトちゃんの処女いただきー♪ あれ、挿れただけでイっちゃった? マンコがギチギチに締め付けてくるよ!
どう、このチンポ? やっぱり気持ち良いでしょ! ほら我慢しないで またイっちゃえっ!】

ばんっ♥ ばんばんばんばんっ♥

「あひっ♥♥ それっ♥♥ スゴっ♥♥ はうううん♥♥」

(スゴいっ♥♥ チンポっ♥♥ チンポでっ♥♥ オマンコ気持ち良いっ♥♥ ああダメよ、快樂に流されちゃ♥♥
でも……♥♥ でもおお……♥♥)

数度 突かれ、圧倒的な快感に早くも決意が揺らぐ。
表情はだらしなく乱れ、苦痛ではなく恍惚感で涙腺と唾液腺が緩んで歡喜の雫が溢れていく。

【泣くほど気持ち良いんでしょ? ほらいけっ! 処女姦でアクメ晒せっ!】

ばんばんばんばんばんばんっ♥

「ひいひいひいん♥♥ アクメっ♥♥ アクメは らめえっ♥♥ ちんぽっ♥♥ ちんぽスゴすぎてダメええっ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で!